

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成9年3月

日本道路公団高松工事事務所
香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例 言

1. 本書は、四国横断自動車道建設に伴い、平成8年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。

3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所 長	大森 忠彦
	次 長	小野 善範
総務	参 事	別枝 義昭
	係 長	前田 和也
	主 査	西村 厚二（平成8年5月31日まで）
	主任主事	西川 大
	主 事	佐々木隆司（平成8年6月1日より）
調査	参 事	近藤 和史
	主任文化財専門員	大山 真充

予備調査・中谷遺跡	文化財専門員	大久保徹也
	技 師	住野 正和
	調査技術員	高橋佳緒里
予備調査・林浴遺跡	文化財専門員	北山健一郎
	主任技師	吉田 智
	調査技術員	森川 歩
中間東井坪遺跡	文化財専門員	谷畑 雅稔
	技 師	信里 芳紀
	調査技術員	貞廣智代美
大山遺跡・中谷遺跡	文化財専門員	中西 昇
	技 師	松本 和彦
	調査技術員	福西由実子

4. 本書の執筆は、第1章については大山が、第2章についてはそれぞれ担当者が行い、目次にその文責を記している。また、本書の編集は北山が担当した。
5. 挿図の一部に、国土地理院地形図（1/25,000）および地勢図（1/200,000）を使用した。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過（大山）	1
第2章 調査の概要	4
中間東井坪遺跡	4
1. 立地と環境（谷畑）	4
2. 調査の方法（信里）	4
3. 調査の概要（信里）	4
4. まとめ（信里）	6
林浴遺跡	9
1. 立地と環境（北山）	9
2. 調査の概要（北山）	11
3. まとめ（北山）	12
大山・中谷遺跡	13
1. 立地と環境（住野）	13
2. 調査の概要	14
大山遺跡（松本，中西，住野）	14
中谷遺跡（松本）	17

挿図目次

写真目次

第1図 平成8年度調査遺跡位置図	3	写真1 第1面完掘状況（北より）	5
第2図 周辺遺跡位置図	4	写真2 D2Ⅳ層内遺物出土状況	6
第3図 調査区中央東西土層模式図	4	写真3 H3Ⅴ層内翼状剥片出土状況	6
第4図 中間東井坪遺跡平面図	7	写真4 SD01・02・04（南より）	11
第5図 出土遺物実測図	8	写真5 SD01土層断面	11
第6図 周辺遺跡位置図	9	写真6 SD02土層断面	12
第7図 林浴遺跡遺構配置図	10	写真7 SD02勾玉出土状況	12
第8図 SD01土層断面図	11	写真8 I区SX01（西より）	12
第9図 周辺遺跡位置図	13	写真9 大山遺跡Ⅱ区全景（南西より）	14
第10図 ST01平・断面図	14	写真10 ST01人骨出土状況（南より）	14
第11図 大山遺跡遺構配置図	15	写真11 SD15遺物出土状況（北東より）	16
第12図 中谷遺跡遺構配置図	17	写真12 テラス状平坦面と段差（北東より）	18
第13図 中谷遺跡調査区南西壁面図	17	写真13 中谷遺跡全景（西より）	18

第1章 調査に至る経緯と経過

1. 概要

四国横断自動車道は徳島県阿南市から香川県及び高知県高知市・須崎市を経て、愛媛県大洲市に至るまでの、四国をS字状に横断する延長462kmが、国土開発幹線自動車道建設法に基づいて計画されている。

香川県内の横断道建設については西から東に向かって建設が進められ、これに伴う埋蔵文化財の保護については、下表のように2区間に分かれて発掘調査が実施された。なお、三木～津田間については高松東道路（自動車専用道路）として建設省より調査を受託し、本年度で発掘作業が完了した。

項目 区間	発掘		整理・報告	備考
	面積(m ²)	期間		
豊浜～善通寺	211,500	昭和57～昭和62年度	昭和61～平成6年度	事業完了
善通寺～高松	319,201	昭和62～平成3年度	平成3年度～継続中	
(三木～津田) (高松東道路)	30,711	平成2～平成8年度	平成7年度～継続中	建設省より受託

本年度から開始された高松市内区間及び津田～引田間建設工事に伴う埋蔵文化財保護については、平成4年度から県教育委員会と日本道路公団とで事前協議が開始された。

平成5年度には両区間に建設の施工命令が出され、平成6年度には中心杭の打設が行われた。このような動きを受けて、県教育委員会は平成7年6・7月に分布調査を実施し、その結果に基づき、津田～引田間は22地区、高松市内区間7地区について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公団に通知した。

日本道路公団は、県教育委員会の意見を踏まえ、平成7年10月文化庁と協議を行い、平成8年1月文化庁より「工事の施工に先だって発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより平成4年度からの事前協議は終了し、平成8年4月、県教育委員会と日本道路公団とで埋蔵文化財発掘調査について委託契約が締結され、さらに県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとで発掘調査の委託契約が締結され、本年度の発掘調査が開始されることになったのである。

2. 高松市内区間の調査

横断自動車道高松市内区間（中間町～壇紙町、勅使町～前田東町）は県道及び国道11号（南バイパス・高松東道路）の上に建設されるため、埋蔵文化財調査は国道の拡幅箇所等が主な対象となり、建設省施工区間も含めると香川県条里A（中間東井坪遺跡、正箱遺跡）・B・C・D地区、山田郡条里、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡が調査対象となっている。

本年度の当初計画ではこのうち香川郡条里A地区、林・坊城遺跡、前田東・中村遺跡の3箇所が調査対象であったが、用地買収状況により計画が変更になり、前田東・中村遺跡に換えて山田郡条里を調査した。

香川郡条里A地区は予備調査の結果、古川以南において旧石器の包含層が確認されたため、中間東井坪遺跡と名付け、平成9年1月から全面発掘を行った。古川以北の正箱遺跡は家屋が撤去された以後に調査を実施する予定である。

林・坊城遺跡は高松東道路建設に伴い昭和63年度に調査された箇所の南北に隣接する部分が今回の調査対象地である。予備調査の結果、昭和63年度調査で縄文時代晩期の木製農耕具が出土した自然河川の延長部や河川西側の微高地に弥生時代の遺構が展開することが確認された。全面発掘はこれらの部分を対象に来年度以降に実施予定である。

山田郡条里地区は、この付近一帯に建設されるインターチェンジ予定地の北部と中央部分を指す。北部は山田郡条里Bと呼び、県道事業として発掘調査（林下所遺跡）が実施されている。中央部が公団事業として今回調査の対象になった箇所で、山田郡条里Aと呼ばれる地区である。インターチェンジ南部は上述した林・坊城遺跡である。

山田郡条里A地区の調査は予備調査の後、溝状遺構が検出された範囲について林浴遺跡と名付け、全面発掘を行った。

3. 津田～引田間の調査

津田～引田間の調査は、津田町2地区、大内町11地区、白鳥町5地区、引田町4地区、合計22地区が調査対象になっている。本年度の当初計画ではこのうち津田町中谷、大山地区、白鳥町成重地区の3地区が調査対象であったが、用地買収状況や予備調査結果により計画が変更になり、大内町下屋敷、楠谷、原間の3地区を加えた6地区の調査を行った。

中谷地区（遺跡）は予備調査の後、中世の遺構・遺物が集中していた範囲を全面発掘し、本年度で発掘は完了した。

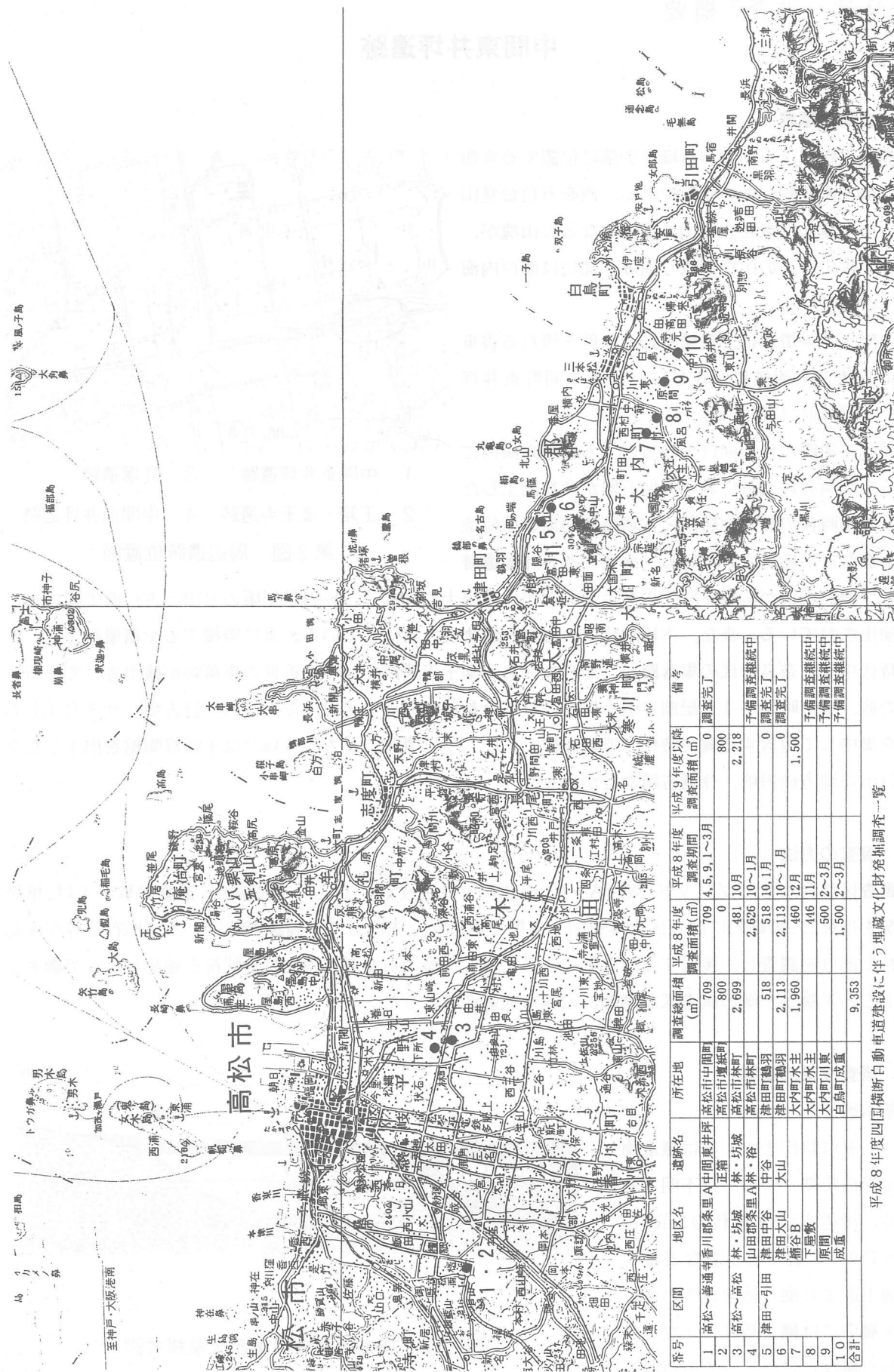
大山地区（遺跡）も予備調査の後、中世の遺構・遺物が集中していた範囲を全面発掘し、本年度で発掘は完了した。

成重地区は対象範囲が約5万㎡と広範囲のため、本年度は予備調査を実施した、弥生時代の遺構・遺物の所在状況を確認した。全面発掘は来年度の予定である。

下屋敷地区は一部の地区を本年度予備調査し、来年度以降も予備調査を継続するとともに一部の地区については全面発掘を実施する見通しである。

楠谷地区はA・B・Cの3地区に細分されるが、本年度はB地区を対象に調査を行った。予備調査の結果、古墳時代の遺構状況が確認され、来年度に全面発掘を実施する予定である。

原間地区はインターチェンジ予定地で、対象面積が広大であり、用地取得が年度末に近かったため、現地踏査を中心に予備調査を実施した。遺構・遺物の包蔵状況の確認及び全面発掘は来年度の予定である。



番号	区間	地区名	遺跡名	所在地	平成8年度 調査面積 (㎡)	平成8年度 調査期間	平成9年度以降 調査面積 (㎡)	備考
1	高松～海通寺	香川郡桑里A	中間東井坪	高松市中間町	709	平成8年度 4.5.9.1～3月	0	調査完了
2	高松～高松	林・坊城	正箱	高松市塩原町	800		800	
3	高松～高松	林・坊城	林・坊城	高松市林町	2,699	481.10月	2,218	
4	津田～引田	山田郡桑里A	林・谷	高松市林町	2,626	10～11月	0	予備調査継続中
5	津田～引田	津田中山	中谷	津田町鶴羽	518	10.11月	0	調査完了
6		津田大山	大山	津田町鶴羽	2,113	10～11月	0	調査完了
7		楠谷B	下屋敷	大内町水主	1,960	466.12月	1,500	予備調査継続中
8		大内町水主		大内町水主	446	11月		予備調査継続中
9		原間		大内町川原	500	2～3月		予備調査継続中
10		成重		白鳥町成重	1,500	2～3月		予備調査継続中
合計					9,353			

平成8年度四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

第1図 平成8年度調査遺跡・位置図

第2章 調査の概要

中間東井坪遺跡

1. 立地と環境

高松平野は、香川県のほぼ中央部に位置する東西約11km、南北約10kmの平野である。西を五色台堂山などの山塊が、東を立石山・雲附山などの山塊が、南を上佐山などの山塊が取り囲み、北には瀬戸内海が広がっている。

中間東井坪遺跡は、高松平野の西部を流れる香東川の支流古川流域に所在し、高松市中間町東井坪502-1番地に位置する。

周辺の遺跡に目を向けてみると、本遺跡の南西にある中間西井坪遺跡において旧石器が多数出土した他、弥生時代の竪穴住居跡・古墳時代前期の埴輪焼成遺構などが確認されている。南東にある兀塚遺跡

では、流路周辺から縄文時代の有舌尖頭器が一点出土した他、13~14世紀頃の水田と古代前半頃の水田が検出されている。また、古墳時代末の掘立柱建物群を検出している。東に隣接する正箱遺跡では、弥生時代中期と奈良時代の集落跡が、その北にある薬王寺遺跡では中・近世の集落跡が検出されている。その他、築造時期が4世紀前半頃と考えられる全長19mの前方後円墳である六ツ目古墳、サヌカイト剥片を集中して包含する縄文時代の遺構を検出した六ツ目遺跡、北方約4kmには土師質陶棺を出土した全長71mの前方後円墳、今岡古墳などがある。

2. 調査の方法

調査区に合わせてグリッド(東西A~K、南北0~13)を設定して(第4図参照)遺物の取り上げ、堆積状況を把握し、最終的に調査区全体を国土座標で覆った。先行して予備調査時にナイフ形石器等が確認された部分を調査し、後述する調査区北側のⅣ層とⅤ層に石器が包含される状況を確認したので調査工程上このⅣ層とⅤ層の調査区北側部分のみ水洗選別を行った。

3. 調査成果の概要

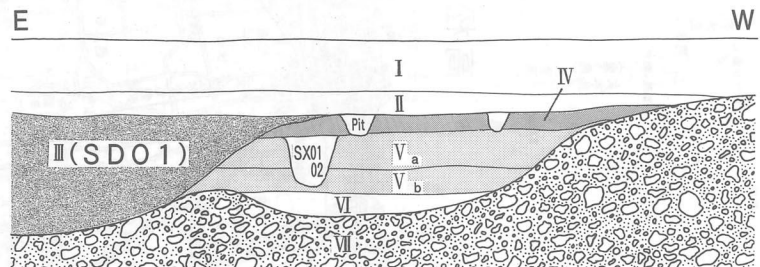
基本層序

Ⅰ層は耕作土でⅡ層は無遺物で形成時期については不明である。後述する8世紀代のSR01・SD01(Ⅲ層)・ピットなどはⅣ層上面より掘り込まれている。Ⅳ層中には縄文時代に比定される石鏃などに混じって旧石器も



- 1 中間東井坪遺跡
- 2 正箱・薬王寺遺跡
- 3 兀塚遺跡
- 4 中間西井坪遺跡

第2図 周辺遺跡位置図



第3図 調査区中央部東西土層模式図

見られる。Ⅴ層はa, bの2層に細別される。そして細別されたⅤa層をベース面にもつ土坑S X02を検出している。この土坑から縄文時代に比定される凹基式の石鏃、チップ等が出土している。またD2区でⅤ層をベースとしてⅣ層を埋土にもつ土坑S X01を検出し、この土坑内に縄文土器が見られることや前述したⅣ層内出土遺物からⅤ層上面は縄文時代遺構面でありⅣ層も同時期に属する。又、Ⅴ層には前述した遺構以外では旧石器しか確認されない。Ⅵ層は火山ガラスである。屈折率の計測値より始良・丹沢¹⁾テフラであることが確認された。Ⅶ層は砂礫層で調査区の西から東へ傾斜する緩斜面を呈する。またこのⅦ層は調査区中央部では浅い低地流路のSD03となっている。後にこの窪地状の地形となっていたところに火山ガラスのⅥ層、旧石器を包含するⅤ層が堆積しているが、Ⅴ層がほぼ水平堆積を見せることや、SD03の東側肩部を一部越えてⅤ層が見られることから、元来はSD01の部分にもⅣ・Ⅴ・Ⅵ層は堆積していて、これらの層の堆積は比較的穏やかな堆積であったと思われる。そして、Ⅴ層が堆積していくなかで旧石器が残されたと考えられるだろう。

古代

SD01 調査区の東側を南からほぼ磁北方向に流れる自然流路である。幅は広い所で約4.5mを測る。現地形のコンターラインに直行し、且つ条理制地割りの坪境の推定ラインからずれることなどから後述する古川の旧河道と思われるSR01へ流れる自然流路であろう。出土遺物は須恵器杯蓋、3のサヌカイト製石鏃、同凹基式打製石鏃・6、9の翼状剥片などがある。



写真1 第1面完掘状況 北から

主体となる遺物は8世紀代の土師器、須恵器であることからしてこのSD01は概ね8世紀代に機能していたと思われる。8世紀代遺物に混じって縄文・旧石器時代の遺物が見られるのはこのSD01が前述したⅣ層とⅤ層を削って流れていた為だと思われる。

SR01 調査区の北東隅において検出した自然河川である。SD01とは違ってラミナ状堆積が認められる砂層と黒色粘土層が交互に堆積している。出土遺物は須恵器大甕・土師器などがあるがSD01出土遺物との時間差は認められない。土層断面の観察よりSD01・SR01ともほぼ同時期に埋没している。

調査区の北側に現地形から判断される高さ約2m程の南から北へ傾斜する段丘崖が存在する。予備調査時にこの段丘崖北側の低い部分、つまり氾濫原にあたる箇所においてSR01に見られるような洪水砂と黒色粘土層が観察されたことや、現在の段丘面上にあるSR01に同様の堆積に見られることからこの段丘崖は現在の古川の旧河道であると思われるSR01によって8世紀後半から9世紀にかけて形成された可能性が高い。他に時期決定が可能な出土遺物は無いが埋土などから判断して古代の遺構と思われるものとしてSD01の西側の肩部付近にピット群が見られる。しかし、規模や配置などに規則性は認められないことから掘立柱建物などを想定することはできない。

縄文時代

SX01 調査区北側グリッドD2において検出した長さ約0.8m、深さ約1.4mの土坑状の遺構である。Ⅴ層をベース面にもつことや前述した縄文時代に比定されるⅣ層を埋土に持つこと、出土遺物として細かな時期の特定はできないが胎土などから縄文時代に比定される土器片を確認しているので同様の時期に比定される。他、出土遺物としてサヌカイト製のチップなどがある。

SX02 SX01に隣接する位置のグリッドE1・E2において検出した土坑状の遺構である。出土遺物として縄文時代に比定されるサヌカイト製の凹基式の石鏃2、同チップがある。V層上面より掘り込まれていることからV層上面は縄文時代の遺構面であると判断できる。他IV層中からは縄文土器片と水洗選別によってサヌカイト製凹基式の石鏃1・同チップなども多数確認されている。

旧石器時代

縄文時代に比定されるIV層中にも旧石器時代の遺物が見られるが一括し記述する。

図示した以外に出土した旧石器をカウントすると以下のとおりである。ナイフ形石器2点、翼状剥片6点、翼状剥片石核3点、横長剥片10点、横長剥片石核1点、チップ100点以上。

4～6、10は翼状剥片である。全体として細かな打面調整を行うものが多い。9はファーストフレイクであり素材の打点を残している。10の翼状剥片は刃縁に使用痕が見られる。7、8は国府型ナイフ形石器である。ともに折損しているが7は折損後、背面をネガ面から再加工している痕跡がある。11、12は翼状剥片石核である。11は上面と側面に自然面を留める。両石核ともに作業面の幅は翼状剥片の最大長に矛盾しない。前述した8の国府型ナイフ形石器と10の翼状剥片は側縁に自然面を残すことなどから11の翼状剥片石核と同一素材である可能性がある。



写真2 D2 IV層内遺物出土状況

4. まとめ

今回の調査では小規模な調査ではあったが比較的良好な旧石器の資料が得られたと言える。資料数は少ないものの瀬戸内技法存在を表す翼状剥片、翼状剥片石核、国府型ナイフ形石器などを網羅していると言えるし、多数のブロックが検出され、又角錐状石器を主体としている中間西井坪遺跡に近接してありながら中間東井坪遺跡では国府型ナイフ形石器を主体として角錐状石器を伴わないという事実は注目すべきであろう。

また一部の層位では縄文時代の遺物と混じることや二次的な移動を受けている可能性も否定できないが層位的に前述したように細かな打面調整を行うといったような純粋な瀬戸内技法のみで石器群が構成されているということは今後、角錐状石器と国府型ナイフ形石器との関係を整理していく上で良好な資料となることは間違いない。今後県下で角錐状石器を伴わない国府型ナイフ形石器主体の量的に多い石器群が層位的に確認されたならば本遺跡で確認された国府型ナイフ形石器主体で角錐状石器を伴わないという事実もより鮮明になるものと思われる。今後石器出土レベルの検討、やや集中して確認された石器群がブロックとして認定できるのかなど上位層出土石器についても含めて検討していきたい。

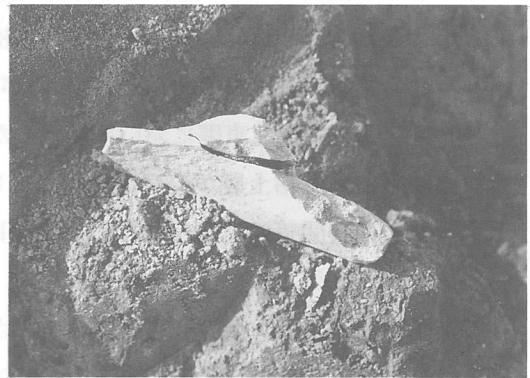


写真3 H3 V層内翼状剥片出土状況

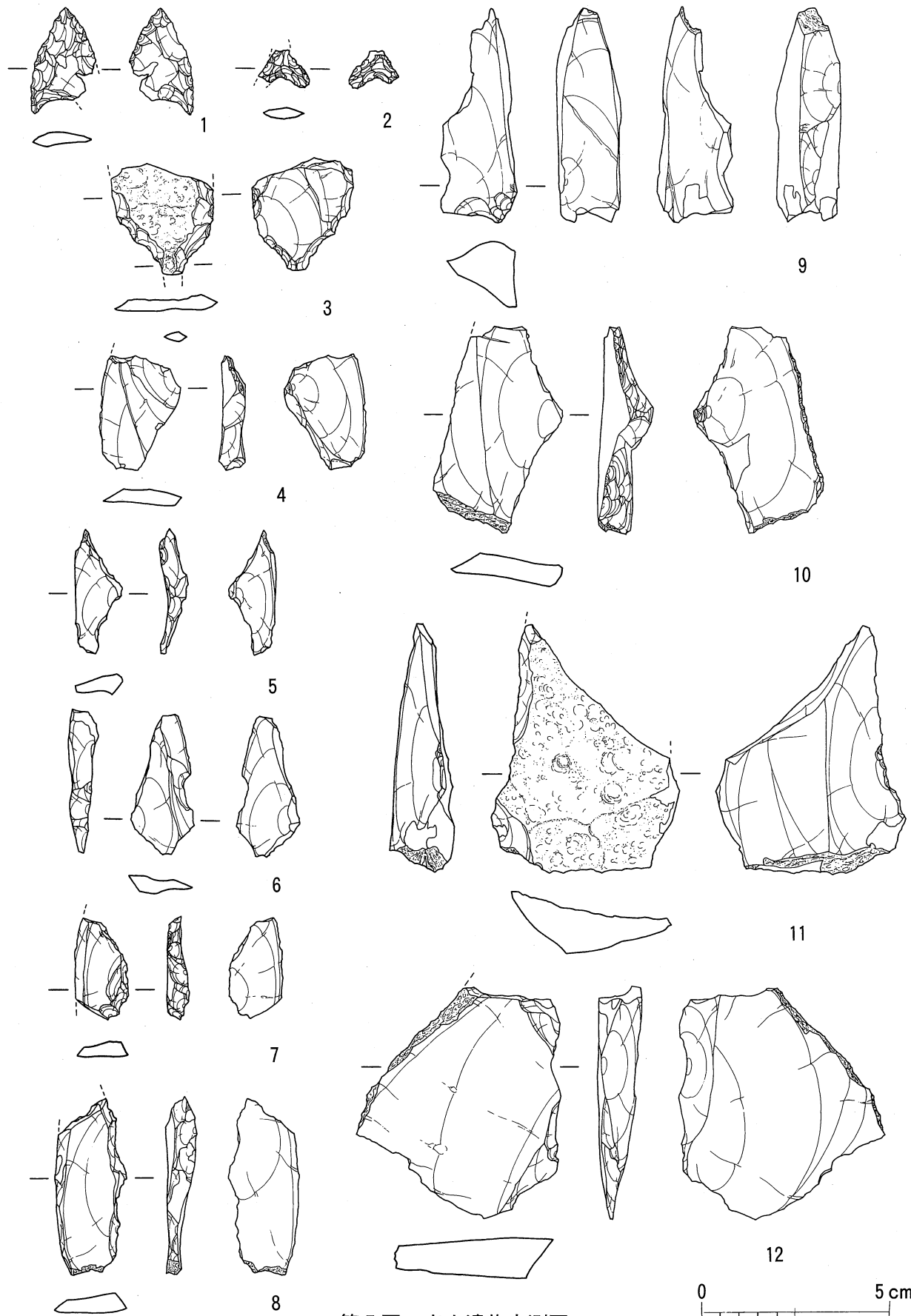
註

(1)香川県立高松高等学校教諭 川村 教一氏に測定していただいた。記して感謝します。



第4図 中間東井坪遺跡平面図

/ I / H / G / F / E / D / C / B / A /



第5图 出土遺物実測図

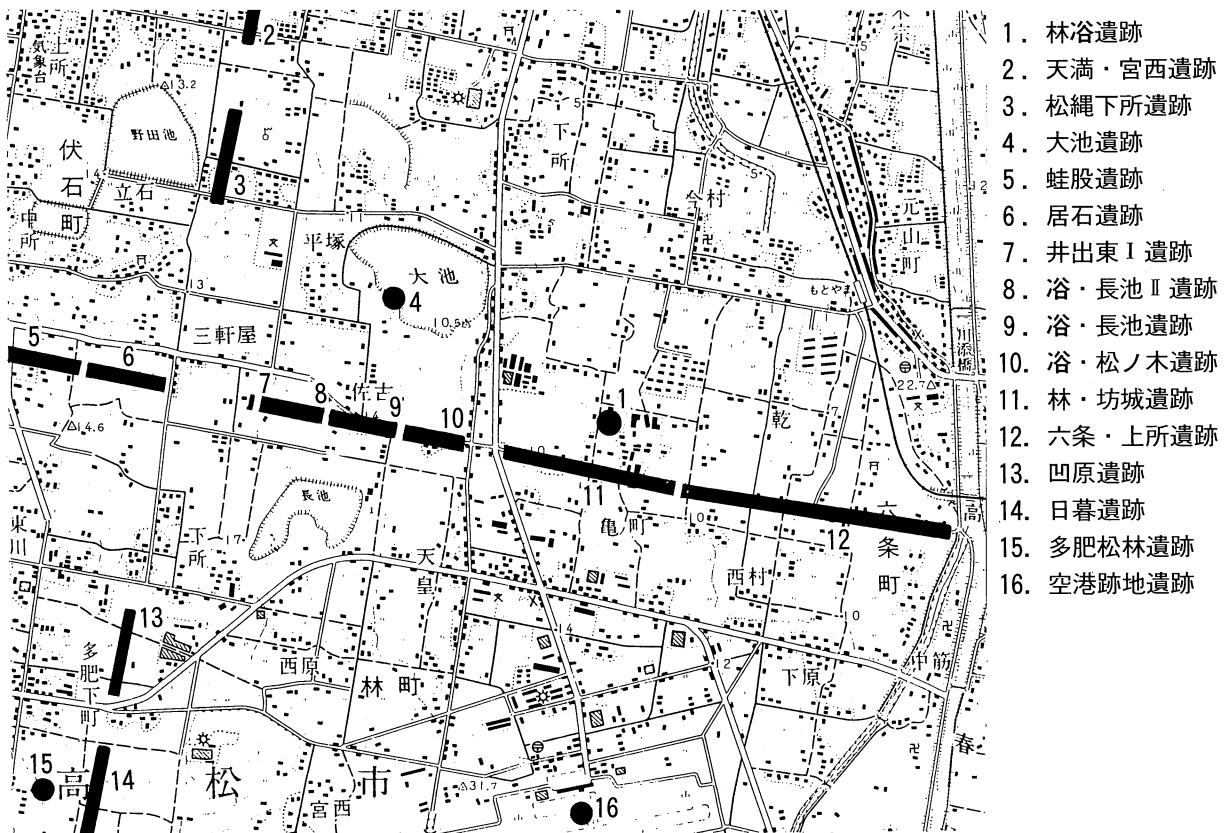
林浴遺跡

1. 立地と環境

林浴遺跡は、高松平野の中央部やや東よりに位置し、香川町川東の西部付近を扇頂、紫雲山・浄願寺山付近を扇端とし、春日川の西側約500m付近まで及ぶ、凹凸が少なく南から北へ向かって緩やかに傾斜する扇状地に属し、標高約9m前後を測る。

周辺には、縄文時代から中世にかけての遺跡が広範囲に分布する。これらのほとんどは、近年の高松東道路の建設、高松市太田第2土地区画整理事業、空港跡地開発事業などに伴うものである。

旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の西側約1kmのところにある大池において有舌尖頭器が採集されている。縄文時代の遺跡としては、縄文時代晩期の土器とともに木製農耕具が出土した林・坊城遺跡が本遺跡の南側に位置する。弥生時代前期の遺跡は高松平野ほぼ中央部に位置する天満・宮西遺跡や浴・長池Ⅱ遺跡がある。中期の遺跡は凹原遺跡や琴が出土した井手東Ⅰ遺跡などがある他、現桜井高校である多肥松林遺跡では中期の土器とともに剣形木製品が出土しており、注目に値する。後期に入ると遺跡は増加し、前述の林・坊城遺跡や空港跡地遺跡では円形周溝墓を検出している。林・坊城遺跡の東隣の六条・上所遺跡では灌漑用と考えられる多数の溝状の遺構を検出している。古墳時代の遺跡としては、本遺跡の北側約1kmのところにある白山神社古墳（円墳）がある。集落跡は太田下・須川遺跡等で古墳時代中期ごろの竪穴住居跡を検出している。古代の遺跡としては、前田東・中村遺跡において大型の掘立柱建物跡を検出しており、帯金具や緑釉陶器等も出土している。付近には古代寺院である宝寿寺跡が所在し、多数の瓦も出土している。中世には平野部へ集落が営まれており、東山崎・水田遺跡では多数の掘立柱建物跡が出土している。

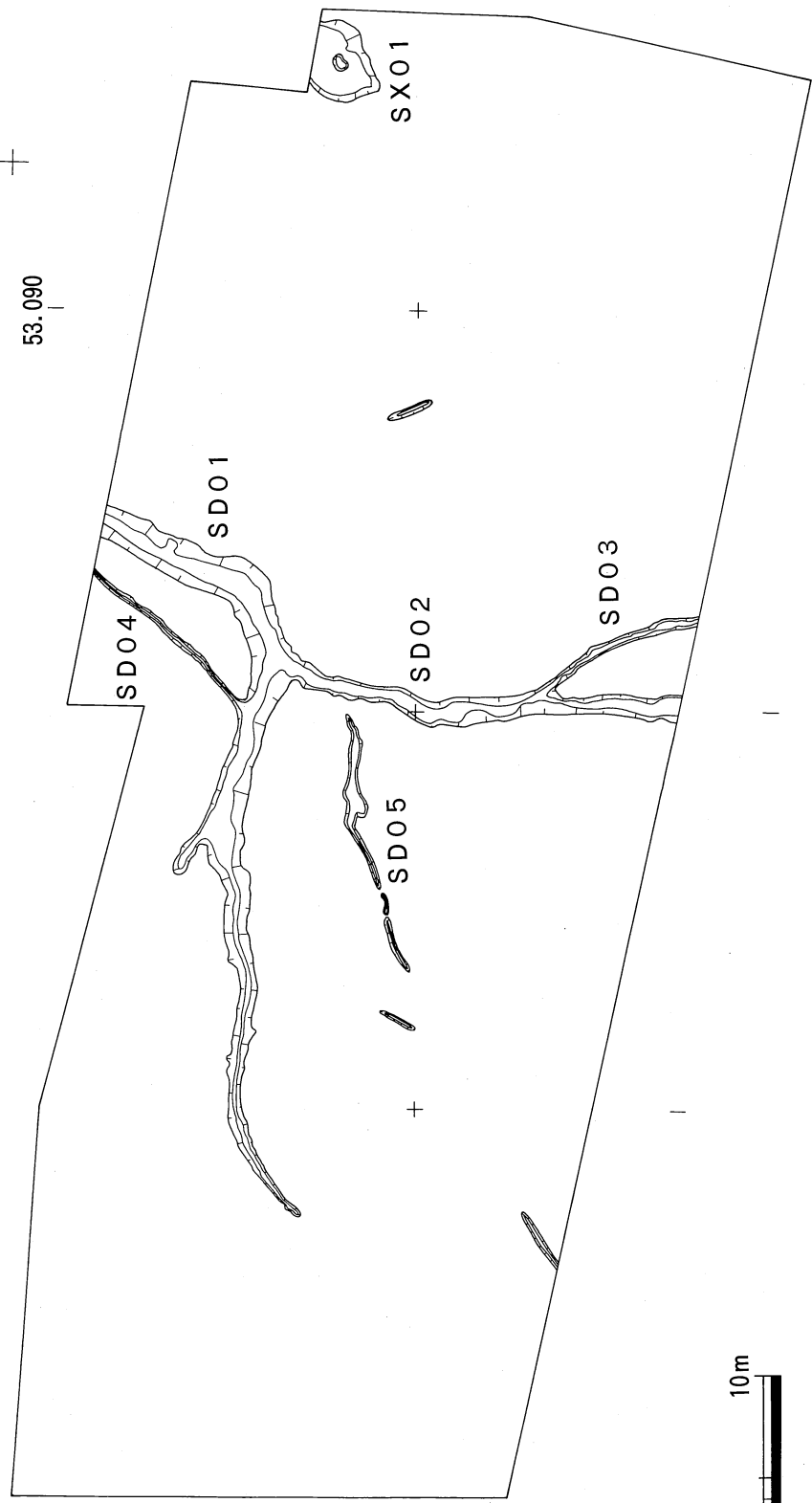
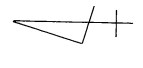


第6図 周辺遺跡位置図

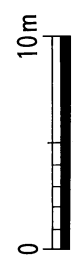
53.050

53.070

53.090



144.730



第7図 林浴遺跡遺構配置図

2. 調査の概要

調査は予備調査の結果、遺構の確認された水田を対象に実施した。調査面積は2,626㎡である。排土の場内展開のため、調査区をほぼ二分し、東側をⅠ区、西側をⅡ区とし、順番に調査を行った。

基本層序は、約30cmの現耕作土の下層に、質の異なる2層の暗茶褐色粘質土が堆積しており、さらに下層に地山である黄色粘土が堆積している状況である。部分的に黄色粘土の下層まで確認した結果、黄色粘土は約1mほどで下層には人頭大の礫層が確認された。

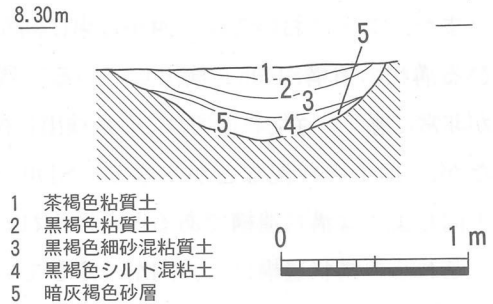
調査の結果、Ⅰ区の西半分とⅡ区の東半分において、数条の溝状の遺構を検出した。一番規模の大きいものはSD01と呼ばれているもので、Ⅱ区の中央部から東に向かって流れ、Ⅰ区へ入ってきたところで北東の方向へ向きを変える。幅は平均して約1.5m、深さは40cmを測る。検出面の上層に堆積している粘質土と明確に区別をつけ難い土層が埋土になっているが、最下層には粗い砂層やシルト質の粘土が認められる。

遺物はほとんど出土していないが、わずかに弥生土器と考えられる土器の細片が数点出土している。他には、砥石と考えられる直方体の石製品が出土している。3面に磨耗した痕跡が顕著に認められ、砥石と判断した。Ⅰ区とⅡ区の境でSD01に流れ込む溝状の遺構がSD02である。幅は1m前後とSD01より若干狭いが、深さはほぼ同じである。埋土も酷似しており、同一時期に併存していたものと考えられる。土器は出土していないが、SD03との合流点からわずかに南側のところで勾玉が2点出土した。2点は30cm程度の間隔をおいて出土した。

勾玉のうち1つは、石製で長さ3cm、幅は1cmで丁寧な作りをしている。表面はきれいに磨き上げており、孔の直径はほぼ一定であることから両側から穿孔したものであると考えられる。もう1つは、孔の部分が少し欠損しており、現存する部分で長さ1.5cm、幅0.4cmである。材質は、断面を観察すると多孔状を呈しており、石灰岩系統のものかあるいは骨の一部を加工したものではないかと考えられる。

また、勾玉が出土した部分から約1mほど北のところでガラス玉が1点出土した。ガラス玉は2つに割れているが、直径5mmの球形を呈する。孔の両側にやや扁平な部分がみられる。色調は、鮮やかな青色を呈している。

このようにSD02からは玉類が3点出土しているものの土器類は全く出土していないため、時期の特定は判断しがたいが、埋土がSD01と酷似すること、SD01へ流れ込む様相を示していることなどから、



第8図 SD01 土層断面図

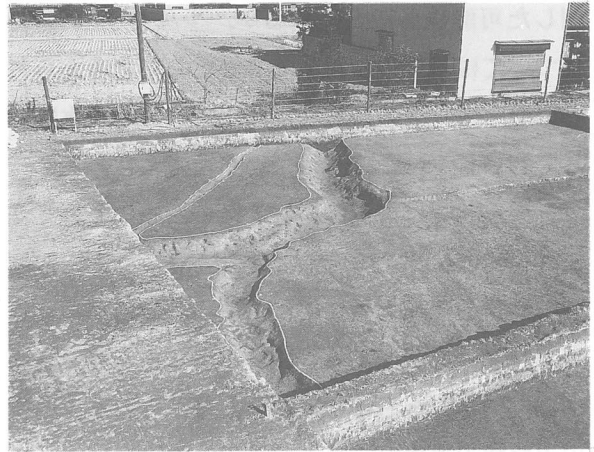


写真4 SD01・02・04 (南より)

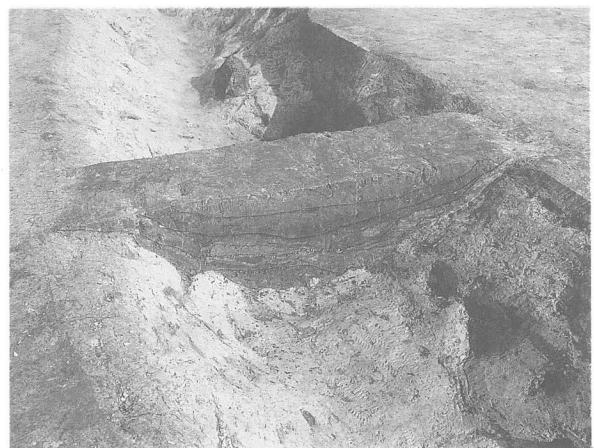


写真5 SD01土層断面図

SD01と併存する時期のものであると考えられる。

溝状遺構群には、この他にSD02に流れ込む幅30cmのSD03とSD01から分岐する幅15cmのSD04がある。いずれの溝状遺構も埋土は、SD01の上層と同じで切り合い関係は認められず、同時期に併存するものであると考えられる。

また、Ⅱ区においては、西から東に向かって延びる溝状の遺構SD05を検出している。残存状況が非常に悪く、途切れ途切れにしか検出し得なかったが、埋土の状況などからみて、SD01～SD04と同じような溝状遺構であると考えられる。

これらの溝状遺構は、方向が一定していないことから、元来は自然の小河川であったのではないかと考えている。分岐する細いものは人為的に掘削した可能性も考えられるが、少なくともSD01については自然の小河川であったものと考えられる。そして、この自然の小河川を灌漑用の水路として利用していたのではないかと考えられる。

林浴遺跡では、その他にⅠ区の西端において、SX01と呼んでいる不明遺構を検出した。円形に巡る溝状の遺構と中央部に土坑状の遺構が認められる。溝は場所によって深さがまちまちで、意図的に掘削されたものではないと考えられる。中央の土坑状の遺構から若干の弥生土器片が出土しているが、その性格は不明である。

3. まとめ

これまでみてきたように、林浴遺跡は、高松平野の中央部の平坦な部分に営まれているが、検出した遺構が溝状遺構のみであるため、その性格は今一つ明確ではない。

しかしながら、このような溝状遺構の在り方は、南側の林・坊城遺跡やその東隣の六条・上所遺跡などにおいてもみられる。いずれも比高差があまりない場所であり、状況は酷似している。このような平坦な部分に集落の痕跡がほとんどみられないのは、後世の削平も関係していることはもちろんだが、あるいは、周辺に水田耕作域が存在していた可能性を示唆しているのかも知れない。検出した溝状遺構群が水田に水を引く導水路的な役割を果たしているとするならば、さらに周辺に大規模な集落が営まれていた可能性も考えられる。

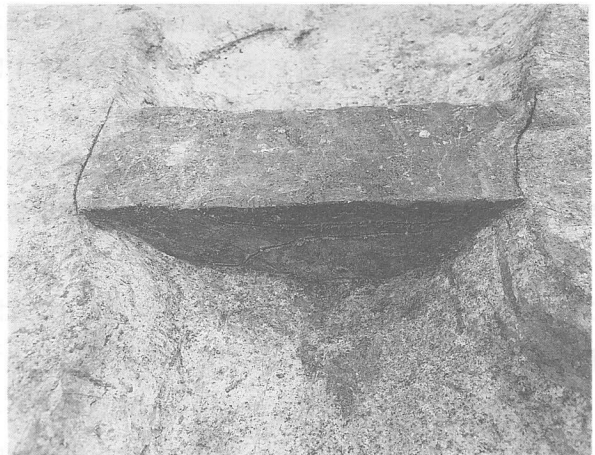


写真6 SD02土層断面図



写真7 SD02勾玉出土状況

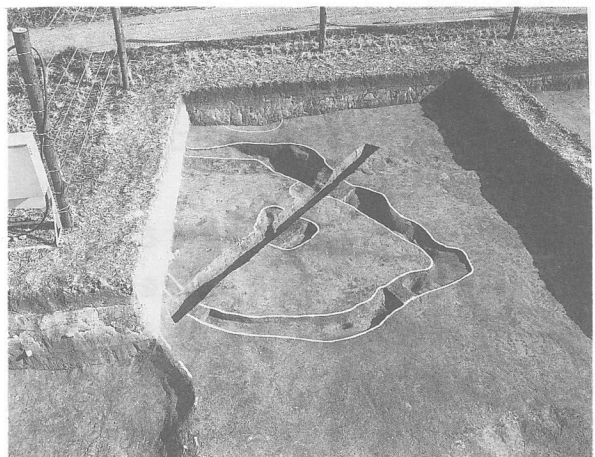


写真8 Ⅰ区SX01(西より)

大山・中谷遺跡

1. 立地と環境

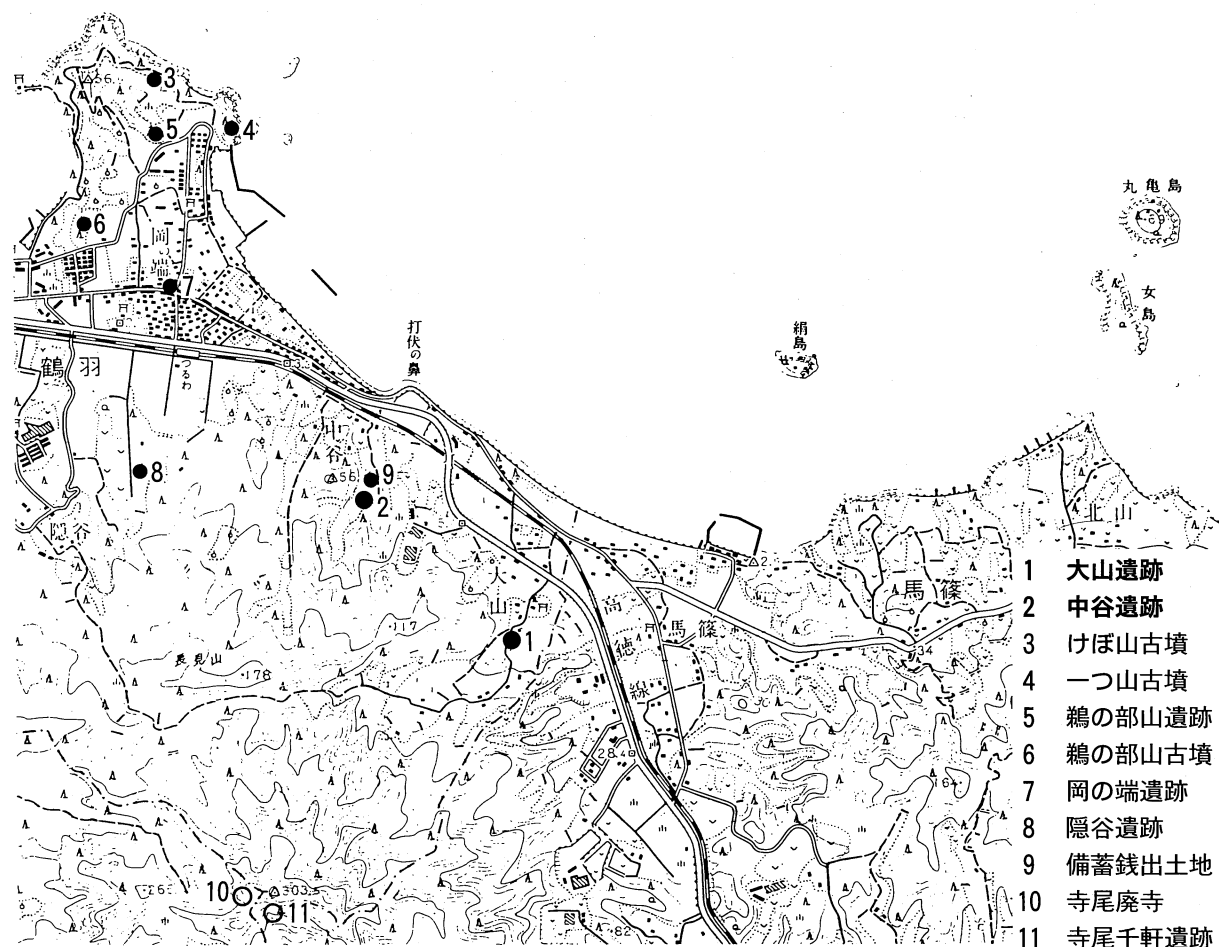
大山遺跡は、津田町と大内町の町境に近い津田町鶴羽2674-1他に所在し、鶴羽山（標高303m）から北東に延びる尾根と、長見山から東に延びる尾根に挟まれた谷部の2次堆積土上に営まれた遺跡である。

中谷遺跡は、津田町鶴羽2405-1他に所在し、長見山の北側斜面の丘陵をカットして造り出した平坦面上に営まれた遺跡である。

現在のところ、大山・中谷両遺跡周辺の縄文・弥生時代の周知の遺跡は少ないが、古墳時代前期には多くの古墳が造られ、津田湾東縁の半島部には2基の前方後円墳と1基の円墳が存在している。

古代の遺跡では隠谷遺跡と呼ばれる包含地が知られている。また、津田町鶴羽地区は鳥羽院政期以降に蓮華心院領鶴羽荘（皇室領荘園）が存在していた地であり、安元2（1176）年2月日の八条院所領目録（山科家文書）に「蓮華心院御領（中略）鶴羽」と見えるのが同荘の初見である。

中世の遺跡・遺物では、大山遺跡の近隣から昭和初期に小型の金銅仏が出土したと伝えられている。さらにその南方の鶴羽山には中世山岳寺院の寺尾廃寺が所在するといわれ、金銅仏との関係もうかがえる。中谷遺跡の周辺では、平成2年頃の隣接道路工事の最中に、埋納時期が14世紀後半に推定される備蓄銭が出土している。また、その北方の鶴羽の港が、文安2（1445）年正月から同3年正月にかけての兵庫北関での入船に対する関税賦課の記録『兵庫北関入船納帳』に、鶴箸（羽）として頻繁に見られる。



第9図 周辺遺跡位置図

2、調査の概要 <大山遺跡>

調査地は町道大山幹線沿い緩斜面の段差のある田で、発掘面積1,610m²について発掘調査を実施した。調査区は、道路公団の中心杭を用地内にもつ畦畔を境に南をⅠ区、北をⅡ区、町道を隔てた西側をⅢ区と設定した。対象地は、鶴羽山から延びる尾根の一支脈斜面部と西の埋積谷部に位置し、標高は41m前後を測る。調査区内ではⅠ区の南東部とⅡ区の東端が尾根の斜面で、他は埋積谷部にあたる。Ⅰ区南西端からⅡ区中央部にかけて更に浅い埋積谷が北東方向に延びている。基本層序は、現耕作土下に最深度で約40cmの遺物の稀薄な堆積層、10~20cm程度の包含層を経て遺構面（2次堆積土）に至る。

今回の調査では、Ⅲ区からⅡ区にかけて弥生時代後期の溝状遺構を、Ⅰ~Ⅲ区全般にわたって中世の溝状遺構・土坑・柱穴群等を検出した。またⅢ区において中世と思われる土壙墓を検出した。他に包含層から中世の良好な土器等の資料を得た。以下、主な遺構及び包含層の状況について概略を紹介する。

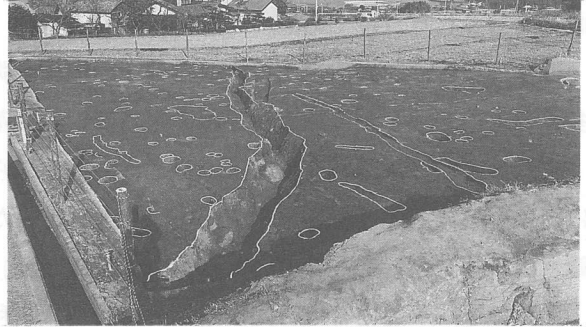


写真9 大山遺跡Ⅱ区全景（南西より）

ST01

Ⅲ区中央やや東寄りの緩斜面で検出した土壙墓である。平面形は歪な楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.71m、深さ0.16mを測る。削平を受けているため本来の深さは不明である。断面形は浅い挿鉢状を呈する。主軸方位はほぼ南北にとる。内部から人骨を一人分検出した。頭骨は北寄り、左右一対の大腿骨及び脛骨が中央部西寄り、半ば土壌化した関節を西向きにして出土したことから、北頭位西向きの屈葬と考えられる。棺の痕跡は確認できなかった。土師器細片の他に明確な副葬品は認められないため時期の特定は困難であるが、周辺遺構の状況などから中世の所産と推定する。

- 1 褐灰色混砂粘質土
- 2 灰黄褐色砂質土

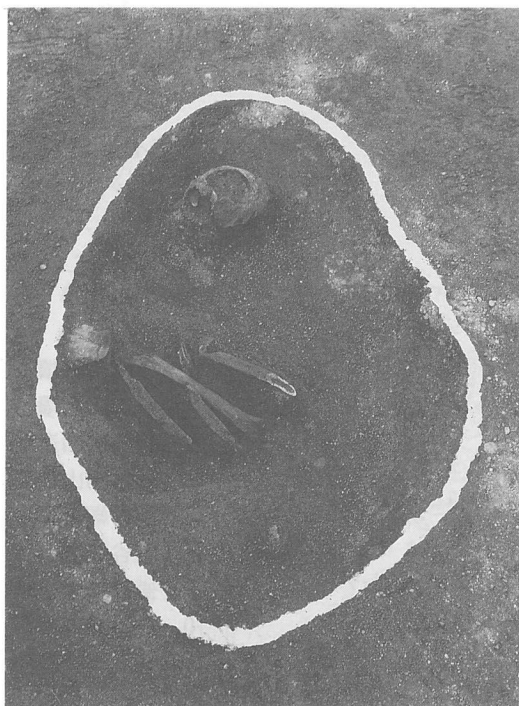
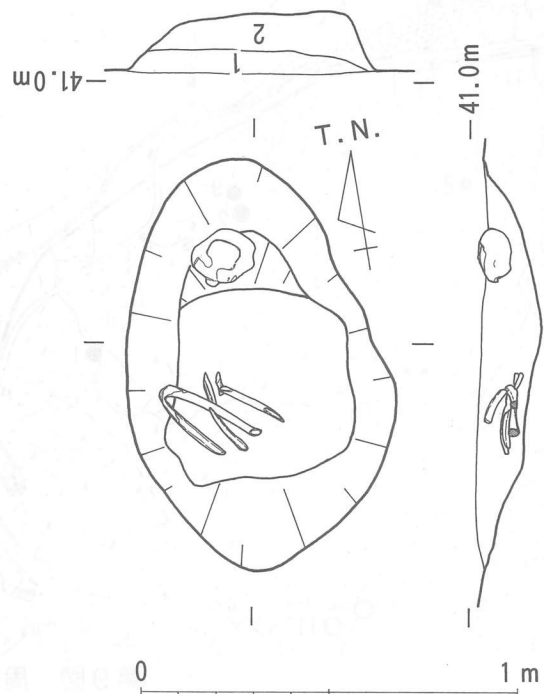
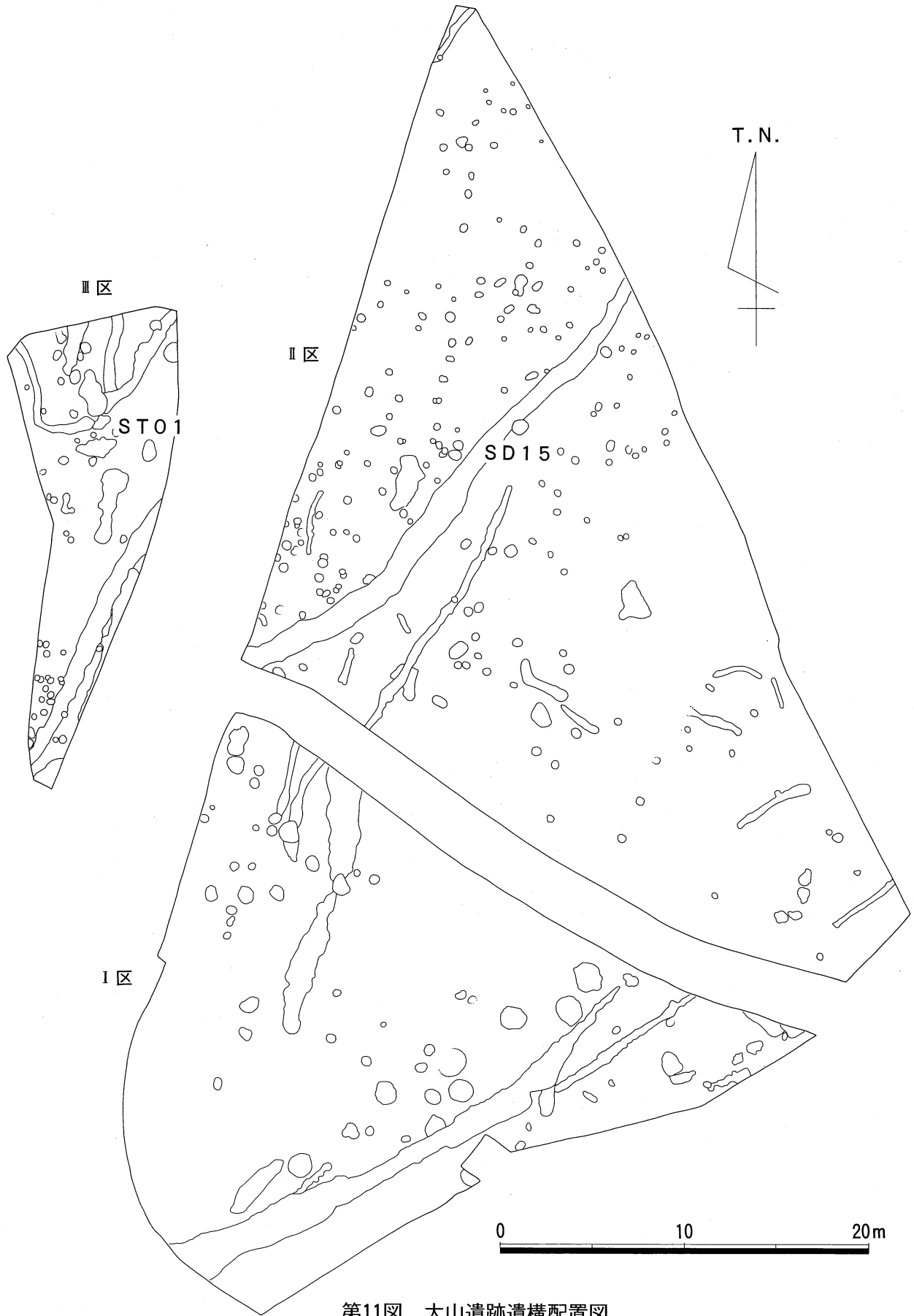


写真10 ST01 人骨出土状況（南より）



第10図 ST01平・断面図



第11図 大山遺跡遺構配置図

SD15

Ⅱ区中央やや西寄りで検出された溝状遺構である。また、Ⅲ区南端部においてもSD15の延長と思われる溝状遺構一部を検出した。幅約0.6m～1.8m・深さ約0.5m～0.6m程の規模で、断面形態は基本的に「V」字状を呈するが、部分的には「U」字状を呈する箇所もある。検出長は31.5m、やや南東に湾曲しながらも概ね南西から北東の方向に走り、南西端と北東端はともに調査区外へ連続する。両端部の底面における比高差は1.05mを測り、北東方向に緩やかに傾斜する。埋土は主に黒褐色混砂粘質土であるが、部分的に砂質土が上層にみられる箇所もある。遺物としては、黒褐色混砂粘質土層を中心に鉢・甕・壺等が出土している。出土遺物の年代観から弥生時代後期後葉の所産と考えられる。



写真11 SD15遺物出土状況（北東より）

まとめ

大山遺跡は、谷部に縄文時代後期に堆積した二次堆積土を遺構面とした弥生時代後期後葉と12世紀後半～13世紀初頭の2時期にわたる遺跡である。両者は同一遺構面で検出でき、遺構面直上には比較的まとまった遺物を含む包含層が堆積している。これとは対照的にSD15を除く遺構からの遺物の出土量は稀薄である。弥生時代の遺構は溝状遺構を1条検出したのみで、他には見当たらない。柱穴の一部がこの時期に該当する可能性はある。大山遺跡の中心的な遺構は12世紀後半～13世紀初頭にあたる時期に営まれたもので、柱穴・土坑・土壇墓・溝状遺構がみられる。なかでも土壇墓は、予備調査においてもⅢ区から1基検出しており、北頭位西向き横臥屈葬という共通性が認められる。土壇墓直上付近の包含層から五輪塔の火輪部が出土しており、何らかの関連が想定できる。柱穴は深さが0.4m前後のものもあり、多数検出しているにもかかわらず、掘立柱建物・柵列を構成するものはない。

遺物は包含層から主に出土している。目を引くのが、土錘である。拳大の大形のものから、小指大のものまでバラエティに富んでいるが、すべて環状土錘である。土師器は在地産の小皿・碗が出土している。底部切り離し手法はすべてヘラ切りで、糸切りの底部は確認できない。瓦器皿・瓦器碗はすべて和泉産のものである。須恵器・青磁・白磁・東播系こね鉢なども極少量出土している。なお、西村産の瓦質碗は一切みられず、瓦質土器の出土は皆無に近い。

大山遺跡では12世紀後半～13世紀初頭の遺構と比較的まとまった量の遺物を確認することができ、東讃地域における当該時期の土器様相を知る好資料を得られた。

当遺跡の周辺には寺尾廃寺をはじめ、金銅仏が出土しているが、これを積極的に肯定する遺構・遺物は確認できなかった。

<参考文献>

林屋辰三郎編 『兵庫北関入船納帳』 中央公論美術出版 1981年

<中谷遺跡>

中谷遺跡は長見山から派生する丘陵先端部に位置し、標高20m前後を測る。調査地は丘陵を開墾し水田化しており、遺構面の一部はかなりの削平を受けていたが、丘陵斜面よりは水田造成土によってかさ上げされているため、遺構は削平を逃れている。

すべての遺構は丘陵をカットして造り出した平坦面に営まれている。このテラス状の平坦面は写真12及び第13図の断面図がしめすように、明確に丘陵を削り込み生活面を確保している。比較的遺存状態の良好な調査区西側ではカットした形跡をしめす段差を検出した。検出した段差の高低差は0.3~0.4mを測る。一方、東側は後世の削平により段差は確認できないが、元来は存在していたと考えられる。この段差の内側に遺構面が存在する。

遺構は柱穴群・掘立柱建物・土坑を検出した。柱穴はほぼすべて0.4m以上の深さを持ち、遺存状態はかなり良い。この柱穴群の一部は掘立柱建物を構成しており、合計3棟検出している。いずれも2間×1間であるが、並び・方位に統一性はみられない。これら柱穴群は少量の遺物を持つが、完形のものではなく、細片のみである。

後世の削平を受けなかった遺構の遺存状態は良好であったが、遺構からの出土遺物は逆に稀薄である。在地産の土師器碗・小皿、和泉産の瓦器碗・瓦器皿が中心遺物で、須恵器・青磁・白磁・東播系こね鉢が極少量出土している。また、丘陵上にも関わらず管状土錘が数点出土している。土師器の底部切り離し手法はすべてヘラ切りで糸切りはみられない。なお、西村産の瓦質碗などの瓦質土器は一切出土していない。

中谷遺跡は遺物から12世紀後半~13世紀初頭に営まれた遺跡である。遺構面直上には概ねこの時期の稀薄な包含層が堆積しており、遺構からの出土遺物もこの時期から外れるものはない。注目すべきは、鶴羽港の背後において、丘陵をカットして生活面を造り出している点である。当遺跡からの海への眺望は優れており、『兵庫北関入船納帳』に記載されている鶴箸と何らかの関連が想定できる。

なお、周辺には金銅仏が出土しており、中世山岳寺院の寺尾廃寺が存在しているが、関連する遺構・遺物はみられない。

<参考文献>

林屋辰三郎編 『兵庫北関入船納帳』 中央公論美術出版 1981年



写真12 テラス状平坦面と段差（北東より）

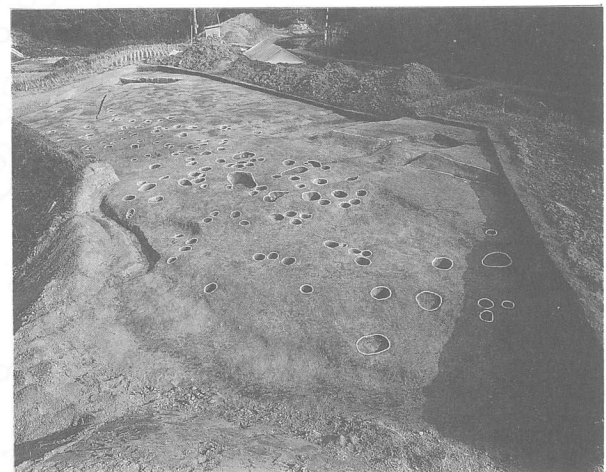
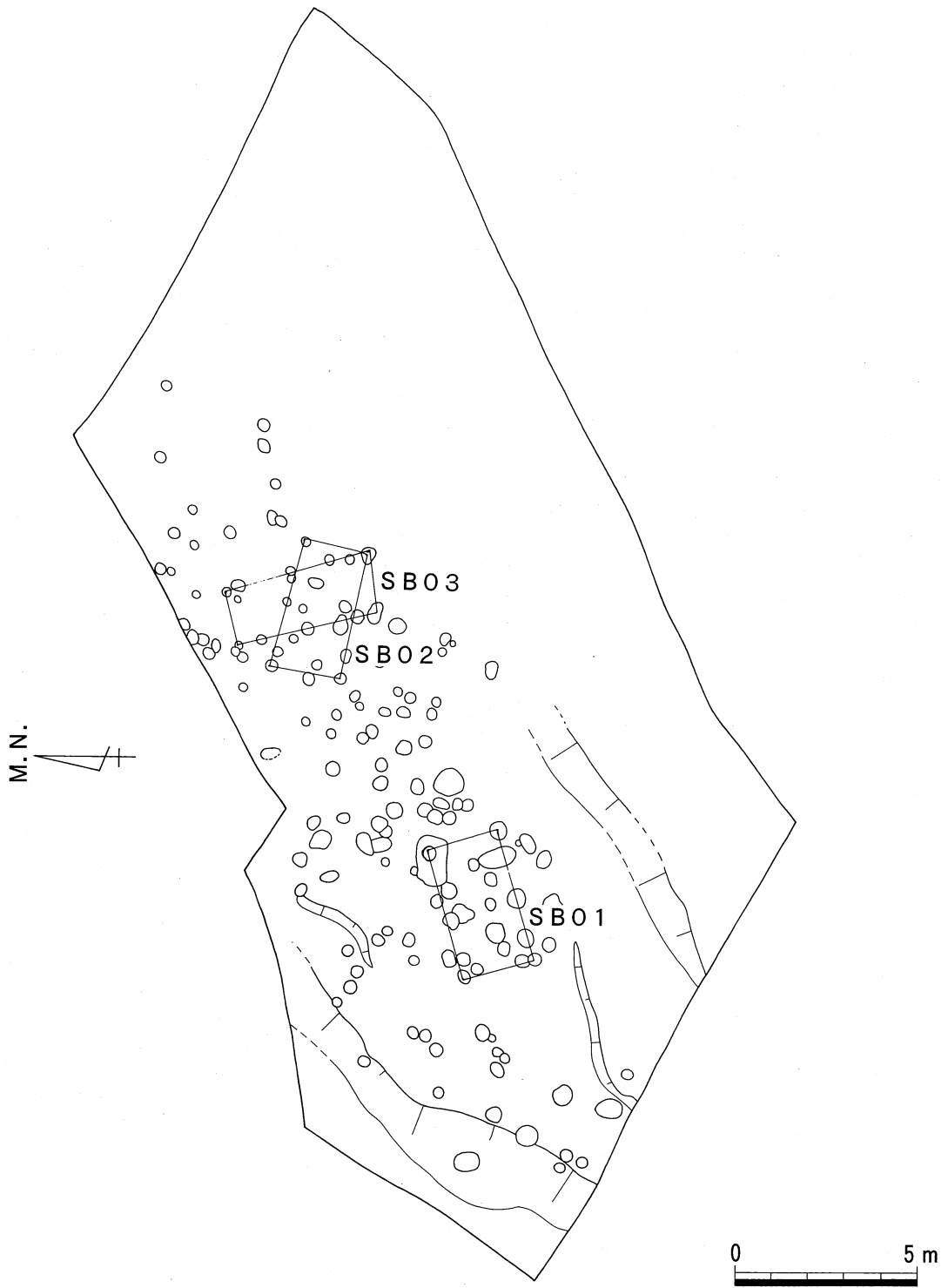
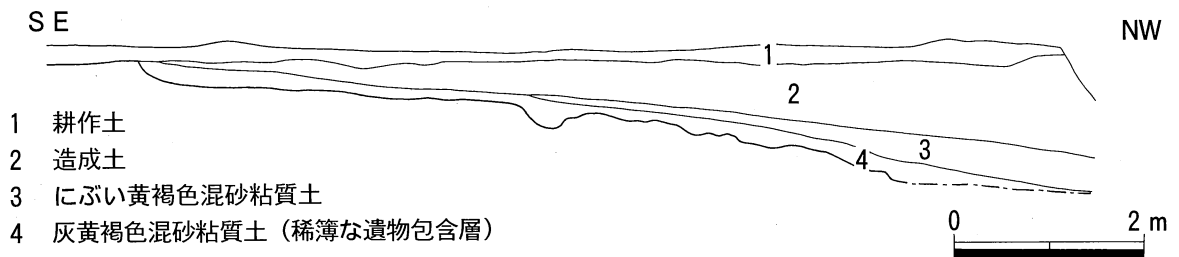


写真13 中谷遺跡全景（西より）



第12図 中谷遺跡遺構配置図



- 1 耕作土
- 2 造成土
- 3 にぶい黄褐色混砂粘質土
- 4 灰黄褐色混砂粘質土 (稀簿な遺物包含層)

第13図 中谷遺跡 調査区南西壁面図

ふりがな	しこくおうだんじどうしゃどうけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名								
巻次		シリーズ名		シリーズ番号				
編著者名	北山健一郎, 信里芳紀, 谷畑雅稔, 松本和彦, 中西 昇, 住野正和							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5001-4							
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	1997年3月31日							
頁数	目次等	本文	総頁	挿図枚数	写真枚数			
	3頁	18頁	21頁	12枚	13枚			
ふりがな	ふりがな	コード	緯度・経度					
所収遺跡名	所在地	市町	遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかつまがしいつぼいせき 中間東井坪遺跡	かがわけんたかまつしなかつまちょうひがしいつぼ 香川県高松市中間町東井坪	37201		34°17'33"	133°59'51"	19970201～ 19970331	709m ²	四国横断 自動車道 建設
はやさこいせき 林浴遺跡	かがわけんたかまつしなかつまちょうひがしいつぼ 香川県高松市林町浴	37201		34°18'20"	134°4'40"	19961201～ 19970131	2,626m ²	
おおやまいせき 大山遺跡	かがわけんたかまつしなかつまちょうひがしいつぼ 香川県大川郡津田町鶴羽	37304		34°16'10"	134°17'20"	19961001～ 19970131	2,113m ²	
なかにいせき 中谷遺跡	かがわけんたかまつしなかつまちょうひがしいつぼ 香川県大川郡津田町鶴羽	37304		34°16'30"	134°17'10"	19961001～ 19970131	518m ²	
遺跡名	主な時代	主な遺構		主な遺物		その他		
中間東井坪遺跡	旧石器時代			翼状剝片 国府型ナイフ形石器				
林浴遺跡	弥生時代後期	溝状遺構 5条		弥生土器片 勾玉 2点 ガラス玉 1点				
大山遺跡	弥生時代後期 12世紀後半～ 13世紀初頭	溝状遺構 1条 柱穴, 土坑, 溝状遺構, 土壙墓		弥生土器片 瓦器, 土師器				
中谷遺跡	12世紀後半～ 13世紀初頭	柱穴		瓦器, 土師器				

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成8年度

平成9年3月31日

編 集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
発 行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
印 刷 富士印刷株式会社